

第六戒「殺してはならない。」

1 中絶はダメなのに、正義の戦争での殺害はいいの？

アメリカでは今原理主義の信仰者が中絶反対を訴えています、その根拠の一つがこの戒めにあります。しかし同じ彼らが 2003 年、「悪の枢軸に対する正義の戦争なのだ」という理由でブッシュ大統領のイラク侵攻を後押しし、多くのイラク人を死に至らしめました。その時々聖書の言葉を文字通り当てはめることが信仰深いことではないのです。では、この第六戒から聞き取るべき教えはどのような内容でしょうか？

2 命の造り主である神は悪人ですら回心することを待たれている神。

第六戒「殺してはならない」はまず「全ての命は神様が造られたもの」から来ています。「人を殺した者には死をもって償わせる」（創世記 9:5）も、その神様だから言える言葉であることが前後の文脈から分かります。しかし、カインがアベルを殺した後、その同じ神様はカインを殺さずむしろ保護されました（創世記 4:8, 15）。またエゼキエル書には、「私は悪人の死を喜ぶだろうか、と主なる神は言われる。彼がその道から立ち帰ることによって、生きることを喜ばないだろうか」とあります（エゼキエル 18:23、ヨナ書 4:11）。そして私たちは、この神様が私たちの罪を贖って下さるためにイエス様をお送り下さったことを聖書から聞き取ったのではないのでしょうか。そのイエス様は、「昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、私は言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる」と言われました（マタイ 5:21-22）。殺すことは剣で命を奪うことだけでなく、言葉で持つてもできます。主のこの言葉から悟らなければならないことは、言われた通りのことを思い描いて怯えることではありません。そうではなく、①もはや誰も自分は罪人ではないとは言えないこと、②その私たちの罪を神様は破格の愛をもって赦して下さることを御子の死で示して下さったこと、③それを知った者として生きていく道を私たちに与えて下さったことなのです。中絶についてはどれだけ母体のことを考えているか、戦争についてはどれだけその戦争を生み出した原因について考えているかが問われて来るのです、私たちにです。謙虚になって、悪人とされる人の救いをも考える中で、この第六戒を重んじることが求められているのです。